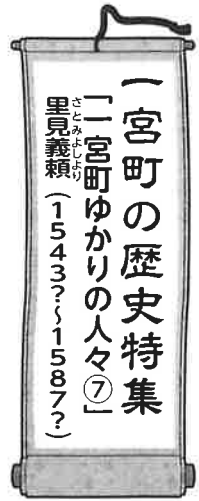


【広報文化財コラム】「一宮の歴史特集」⑦

平成29年4月号



里見義頼は安房国(千葉県南部)の戦国大名・里見義弘(1525?~1578)の子として生まれました(異説あり)。

安房里見氏とは上野国(群馬県)新田の出であり、戦国時代に関東の動乱の中で安房に入国し、戦国大名化した一族です。義堯(1507~1574)とその子義弘の時代には上総下総まで進出し、勢力を拡大しました。しかし、相模(神奈川県)の北条氏の勢力に押され、天正5年(1577)に和睦を結びます。その際、両者の領土の境目は、西は養老川、東は一宮川だったと考えられています。

天正6年(1578)、義弘が亡くなると、里見氏では後継者争いが勃発します。安房国を拠点にしていた義頼は異母兄弟の梅王丸と家督を争い、天正8年(1580)に梅王丸の拠点の上総国を制圧し、家督を継承しました。その翌年には反旗を翻した小田喜城(現大多喜城)の正木憲時を滅亡に追い込み、領国支配を強化します。この時、一宮にいた正木氏も反乱に加わっ

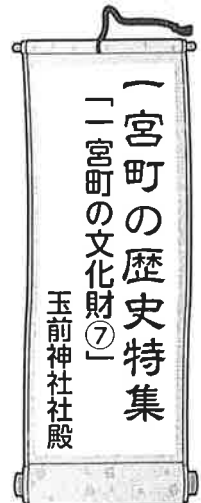
たようで、憲時とともに滅亡したとみられています。写真の玉前神社への寄進状は、天正10年(1582)のもので、憲時の乱の後、一宮地域は里見氏がしばらくの間直轄したようです。なお、東浪見地区は里見氏家臣の正木時盛という人物に与えられました。義頼は北条氏との同盟を維持しながらも、のちに天下人となる豊臣秀吉や反北条氏勢力と音信をもつなど、外交面でも手腕を発揮しました。内政・外交両面で活躍しましたが、晩年は病気がちだったようで、天正15年(1587)、安房岡本城(南房総市)で亡くなったといわれています。



▲ 里見義頼寄進状(町指定文化財。玉前神社所蔵。現在県立中央博物館大多喜城分館に寄託中)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年5月号



玉前神社は一宮町の名称の由来である「一宮」すなわち、上総国(千葉県中央部)で最も社格が高い神社に定められた由緒ある神社です。祭神は玉依姫命です。

古くから信仰を集めてきました。創建年代は資料がないため不明です。延長5年(927)の『延喜式神名帳』では「名神大社」という社格に列せられており、この頃には既に上総国における有力な神社として国家的に認められていたことがわかります。また、例祭である「上総十二社祭り」(県指定無形民俗文化財)の始まりが大同2年(807)といわれていることから、それ以前には既に存在していたと考えられています。

戦国時代後期に戦乱の中で一宮城とともに兵火に遭い、焼け落ちたため、古記録や宝物などが失われたといえます。

その後、飯岡の玉崎神社(旭市)に一時避難し、現在地に再建されました。天正10年(1582)には里見

義頼(広報前号文化財コラム参照)より宮地の寄進をうけています。現在の社殿は残された棟札によると貞享4年(1687)の建築であることがわかります。この棟札は社殿とともに千葉県の指定文化財となっています。

明治4年(1871)には国幣中社に列せられました。その後、明治33年(1900)、大正12年(1923)と社殿などの改修が行われています。

そして平成29年3月、平成19年(2007)より始まった「平成の大修理」が終了し、玉前神社は新たな輝きを放っています。その姿は、まさにこの町のシンボルとしてふさわしいものです。



▲ 玉前神社 社殿

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416